

断簡四

天易真分は端坐し、一幅の茶掛を手にとって眺めていた。それは柔らかな細い筆の仮名文字がちらし書きされた墨蹟を切り取って断簡にし、名匠が意匠を凝らして装幀したものだ。そんな真分の様子を畳に立膝して見ていたゞ裂が竟に尋ねた。

「良い出来だな。何と書いてあるんだ」

「これか。こうさ。『磨りなじませて軟す 自然たる 障なし』ってね」

「どういう意味さ」

「例えば、こういうことだ。

すべての知性が（意識の持つ『志向』という性質上、存在としてしかあり得ない知性というものが）感覚であるとしよう。そのように措定するんだ。だが感覚とは何であろうか。わからない。わかるはずがない。わかりようがないからだ。

そもそもわかるとは何だ。

何もなく、他はなく、ただ経験、すなわち『事実（現実）』とやら、これだけだ。究竟の真理もへったくれもない。

我々は辛うじて感覚の限界の範囲内で感覚とは擦り込みであることを知っている。時間をかけて擦り込ませればいつしか感覚も転回する。

そもその価値観を転回すれば死すべき運命も虚しくはない。

そうすれば自由無礙寛闊して、富貴にも拘らず、きよらさやかで清々しい。かろらかで、ひろやかだ。心配も悩みもない。ただ生きて、ただ死ぬだけだ。

だがそれは特異なことではない。

草花も虫けらも動物たちも、名も業績も残さず、さように生きているではないか。

身も蓋もないことを言っていると思われるかもしれない。机上の空論、虚しい戯論と思われるかもしれない。しかしさような価値観が既に自己体験的経験と歴史的経験によつて擦り込まれた『感覚』なのだ。時間をかければ嘘のように変わるであらう。

その程度のものでしかないのだ」

閑

※志向性：意識は志向性を有する。意識は常に何かに対する意識である。意識はどうしても何かへの意識としてしか有り得ない。志向は意識自体とも言える。そして我々が知る存在すべてこれ以外ではあり得ない。これ以外を知らない。だからこれ以外があるとも言えない。我々はこのような限界の範囲内でしか思考できないが、そもそも限界というものが何かも定かではないとも言えるし、そつでないかもしれない。考えるべきがない。